



日本史学専修（研究室紹介）

三好，啓介

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:2*-4*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491659>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491659>



日本史学専修

三好 啓介

日本史学専修修士二年の三好啓介と申します。私は二〇二〇年度の学部二年生の頃より日本史学専修に所属し、日本古代史を対象として研究を進めております。そのため、本稿では古市教授の古代史ゼミについてご紹介させていただきます。

古代史ゼミは主に木曜日の四限に、学部二年生以上を対象として行われています。学部生による報告を中心として進めていく授業ではありますが、議論には院生も参加します。私は二〇二〇年度よりゼミに参加しているの
で、そこから現在までのゼミの様子をご紹介します
と思います。

前期には『るいじゅうさんだいさく類聚三代格』という史料を対象として、史料報告とそれに応じた議論を行っています。『類聚三代格』というのは平安時代に編纂された法令集です。古代には国家の基本法として「律令」が存在し、その補完の

ために出された法令が「格式」です。そのなかでも、律令の修正・補足をしたもののが「格」となります。『類聚三代格』という史料名に見える「三代格」というのは、九一〇世紀に編纂された『弘仁格』・『貞観格』・『延喜格』という三つの格を指します。これらを「類聚」（同じ種類の事項を集める）した法令集が『類聚三代格』です。

日本の古代社会の実態を解明するにあたって、日本古代の法令の検討は欠かせないものであります。しかし、残念ながら『弘仁格』・『貞観格』・『延喜格』は現存していません。そのため、現存する『類聚三代格』が大きな意味をもつのです。三代の格を内容ごとに分類し直した『類聚三代格』は、古代の法令を復元・類推するにあたって非常に重要なものであり、古代社会を知る手掛かりとなります。

この『類聚三代格』を史料演習のテキストとすることは、これから古代史料の扱い方を学んでいく者にとっても意味のあることです。この史料には「注釈本」が刊行されていません。現在、多くの古代史料（特に古代国家が中心となって編纂されたもの）にはいわゆる「注釈本」という、難しい漢文を書き下し（解釈を載せるものも）、難しい語句には注釈・解説を付けるものが刊行されています。古代の史料を読み進めるにあたって、多くの初学者がこの「注釈本」を頼りにするでしょう。しかし、『類聚三代格』にはこれがないのです。そのため、ゼミに参加した学生は皆、目の前の漢文を何のヒントもなく書き下し、解釈していかねばなりません。もちろん自分で考えても分からないときは先輩方に聞きつつ、読み進めていきます。これまで『類聚三代格』を講読したことで、私の古代史料を読む力はかなり鍛えあげられたと思います。こういった面でも、『類聚三代格』をテキストとすることに意味を感じている次第です。

後期には『入唐求法巡礼行記』という史料をテキストとして、ゼミを進めています。『入唐求法巡礼行記』とは、延暦寺の僧である円仁による承和五（八三八）～同十四年（八四七）の唐の滞在記録で、全四巻からなります。この史料には、遣唐使の様子や当時の唐の政治・社

会状況などが記されているだけでなく、公文書の写しなども載せられており、平安時代初期の仏教史・対外交流史・交通史などの基本的な文献となっています。日本僧が中国に渡る話であるため、日本史だけでなく、中国史や新羅史でも研究の対象となっており、日本史という分野に限らない非常に重要な史料です。

本史料からは唐の社会の大きな流れだけでなく、民衆の生活などのより細やかな情報も読み取ることが出来ます。円仁が旅の道中で出会った人びとの様子や、泊まった場所で食べた食事など、当時の民衆の衣食住を知ることができ、研究史料としても、旅行記としても、興味深い記述が多くなされています。

また、この史料は円仁の滞在記録であるため、講読を進めていくたびに、円仁の旅も進んでいきます。そのため、その人がどの年度の古代史ゼミに参加したかで、円仁との思い出も異なります。ここで少し、私の円仁との思い出を語ってみたいと思います。

詳細は割愛しますが、円仁はいろいろあって五台山を巡礼することを旅の目的の一つに定めます。この五台山巡礼は、円仁の人生にとっても、『入唐求法巡礼行記』にとっても、一つの大きな山場です。私がゼミに初めて参加したとき、円仁はまさに五台山にさしかかっている

ところでした。学部二年生の私が初めて報告を担当した部分では、円仁は五台山の険しい道を苦しみながら登っていました。そして時を経て、学部四年生となった私が最後の報告で担当した部分では、円仁は他の僧たちとともに山頂の神秘的な景色を前に涙を流していました。長く行われてきた『入唐求法巡礼行記』の講読のなかで、困難な状況にあっても宿願を果たし、感涙に咽ぶ円仁の姿を見届けることができたのは、幸運であったと感じています。そして現在、円仁は五台山から下山しており、今後は「会昌の廃仏」という暗く厳しい現実に直面していくことになるでしょう。私は円仁との旅路をどこまでもにできるのか、後期の古代史ゼミが楽しみでなりません。

さて、古代史ゼミでは前期・後期を通じて、フィールドワークを盛んに行っていることも特徴の一つだと思います。コロナ禍がおさまってからは、毎年恒例の正倉院展だけでなく、学生考案で様々な場所を訪れています。これまで多くの博物館や遺跡に行き、学んだことはたくさんあります。現地に行くことでしか得ることのできない学びを、これまでいくつも実感してきました。そして何より、フィールドワークを通じた先生・院生・学部生の盛んな交流が、今の日本史学専修のあたたかい雰囲気

を作り出していると思います。この活動はぜひとも続けていきたいですし、今後も長く続くよう願っております。

以上が私からの専修紹介になります。古代史以外のゼミの紹介は、来年度以降に行われるようです。古代史ゼミについても、ご紹介すべきことはまだまだありますが、それはもう一度古代史ゼミ紹介の機会が回ってきた際の担当者に任せ、今回は終わりとさせていただきます。最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。